

聖書箇所：第一サムエル記 27 章 8～12 節

説教題：神はどこにおられるのか

あらすじ

ダビデはサウルからいのちを狙われております。イスラエルの中には安住の場所はありません。このままではいつか殺されます。ダビデは生き延びられる道がどこにあるか探し続けます。そして一つの決断をします。敵であるペリシテ人のリーダーであるアキシュのところへ逃げ込もう。今のことばで言えば亡命ということです。しかし、ペリシテ人はダビデがかつて戦った相手です。手ぶらで行っても、ただ殺されるだけです。お土産が必要です。自分たちを生かしておくほうが、アキシュにもメリットがあると思わせる必要があります。

ダビデはアキシュにこう言います。「もし、私の願いをかなえてくださるなら、地方の町の一つの場所を私に与えて、そこに住まわせてください。」

アキシュはこれを聞き「しめた」と思ったでしょう。アキシュだって、自分の国を治めようとしても全部には手がまわらない。都から離れた地方の地域はどうしても手薄になっている。よし、そこにダビデを置こう。敵が攻めてきたらダビデが戦う。もし、ダビデがそこで戦死してもこちらは痛くもかゆくもない。アキシュはそう考える。

この提案はダビデにもメリットがありました。地方に行けばイスラエルの国境から遠くなる。サウルだってそんなところまでダビデを追っては来ない。このように、ダビデとアキシュの利害は一致して、ダビデと家族、

部下たちはツィケラグに住むことになりました。

1 ダビデ：虐殺と嘘の報告

ダビデはツィケラグに移り、ひとまずほつとします。しかし、そこでのんびりと家畜を飼い、畑を耕して過ごすわけにはいきません。自分たちはあくまでもペリシテ人のやっかいものなのです。常に疑いの目で見られています。ちょっとでも怪しいそぶりを見せれば、たちまち殺されるでしょう。ダビデが敵の地で生き延びていくためには、アキシュに対し忠誠を示し続けるしかありません。そのためダビデはどんな事をしたのか、具体的に見ていきます。

8 節。「ダビデは部下とともに上って行って、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲った。彼らは昔から、シュルのほうエジプトの国に及ぶ地域に住んでいた。」

ここに三つの部族の名前が出ております。あまりなじみがない名前ばかりですが、実はこの三つの部族のことは、ヨシュア記と出エジプト記の中に記されています。

全部の部族のことは見ることはできませんが、アマレク人についてだけ確認しておきましょう。イスラエルがヨシュアを先頭にして、アマレクと戦ったという記事が出エジプト記に出て来ます。戦いの間、モーセは丘の頂に登り、そこで手を挙げ続けていたという箇所です。その記事の最後はこう締めくくられています。

「モーセは祭壇を築き、それをアドナイ・ニシと呼び、「それは、『主の御座の上の手』のことで、主は代々にわたってアマレクと戦われる」と言った。」(出エジ 17 章 15, 16 節)

ひとことでまとめると、ダビデが名前を挙げている三つの部族、いずれもモーセの時代からずっとイスラエルの敵でした。ということは、ダビデはペリシテ人の領地に逃げ込んだあと、アキシュに気づかれないようにして、イスラエルの敵と戦っていたことになりました。ダビデがどこまでそのことを意識していたのかはわかりません。結果を見れば神の摂理が働いていたと言えなくもありません。

しかし私たちは、単純には喜べません。「ダビデは、これらの地方を打つと、男も女も生かしておかず、ガテにひとりも連れて来なかった。」同じことばが 9 節と 11 節に二度繰り返されています。なぜそうしたか。「彼らが、「ダビデはこういうことをした」と言って、自分たちのことを告げるといけなと思ったからである。」つまり、口封じです。ダビデがペリシテ人を殺していたということがアキシュの耳に入ったなら、ダビデが殺される。だから皆殺しにした。どんな理由があったにせよ、これは虐殺ではないか。

そしてダビデはこんな小細工もするので。10 節。「アキシュが「きょうは、どこを襲ったのか」と尋ねると、ダビデはいつも「ユダのネゲブとか、エラフメエル人のネゲブとか、ケニ人のネゲブとか答えていた。」ここに挙げられている三つの部族は、今度はいずれもイスラエルの仲間です。ほんとうはペリシテ人を襲っておきながら、その事を隠して、自分はイスラエルの仲間を襲ってきましてと嘘の報告する。それだけではない。アキシュを喜ばすために戦利品をプレゼントし

ています。

皆さん、どう思いますか。モーセの十戒に「殺してはならない」「盗んではならない」「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない」とあります。難しい事情があったとは言え、こんなことが許されるのでしょうか。これはいったい何だろうかと戸惑ってしまいます。

2 罪の残酷さに満ちた現実

この箇所のことをどう考えたらよいのでしょうか。

ある一つの具体例を紹介したいと思います。もう引退されましたが、国連難民高等弁務官をされていた緒方貞子さんという方がおられます。世界各地の紛争地域に出向き、難民救済にあたってきた方です。その緒方さんが、テレビでこんなことを語っていたのを印象深く覚えています。「現場では、いつも非常に難しい判断をせまられました。二つのうちからどちらかを選択しなければならぬとき、どちらを選択するか。どちらの選択肢にも正義というものはほとんどない。どちらを向いても不正、脅迫、嘘と悪がいっぱいある。しかしどちらかを選ぶしかない。そんなぎりぎりの判断がいつも求められた。そういうときどのような判断基準に立つか。緒方さんはこう言いました。「より悪が少ない方を選ぶ。」

私はそれを聞いて驚きました。緒方さんは、正義というものを軽く考えていたのでしょうか。いやむしろその反対です。本音を言えば悪の味方なんかしたくない。けれども何もしなかったなら多くの人たちが死んでいく。多くの人をいのちを救うために、あえて汚いものに手を突っ込んでいくしかない。緒方さ

んの話聞き、それが罪の世の現実なのだということを教えられた思いがしました。

ダビデも同じでした。「なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのか。すべてはサウルのせいだ。」ダビデはそう叫びたい。確かにそのとおりです。しかし、悪いのはあいつで自分は正しいと叫んでも、目の前には依然として厳しい現実がそのままあります。生き延びていくために、ペリシテ人を殺すしかない。生き延びるために、アキシュの前で嘘をつき通していくしかない。生き延びていくためには、それ以外に方法がありませんでした。

すぐには納得できないかもしれません。聖書は、私たちが生きるべき理想の道を示しています。でも、理想論だけを振りかざしているのではありません。聖書は、何が正しくて何が悪であるのか、はっきりと理想を語ります。しかし、もう一方では罪に満ちたこの世界の現実をきちんと直視していきます。残酷と思えるほどの現実をごまかさず、はっきりと書いていくのです。

3 罪の現実を背負われるイエス

さて、ダビデが苦しんでいるとき、神はいったいどこにおられるのでしょうか。ある方はこう考えます。ダビデは、神の指示を仰がず勝手に自分の判断でペリシテ人の地に逃げ込んだので、今その報いを受けているのだ。そのようにして、神はダビデを苦しめているのだということです。仏教用語で言えば「自業自得」ということになります。

しかし、決してそういうことではありません。実は、神ご自身も厳しい現実には直面し苦しみを味わっておられたのです。マタイの福音書2章16節。「その後、ヘロデは、博士た

ちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」

今から二千年前、当時イスラエルの王であったヘロデは、イエスがお生まれになったことを博士たちから知らされました。ヘロデは考えます。イエスは王の地位を狙うために、やがて自分を殺そうとするに違いない。危険な芽は小さなうちにつぶせ。それが権力者の鉄則です。でも一つだけ問題があった。イエスがどの子どもであるか絞りきれない。そこでヘロデは二歳以下の男の子を皆殺しにします。幼児虐殺です。

神のひとり子がイエスがこの世に来られたとき、何の関係もない子供たちが何十人も殺されてしまいました。もし私たちがイエスの立場であればどう思うでしょう。悪いのはヘロデ王だと言いついて納得しますか。いや、だれだって自分を責めるでしょう。「自分が生きていることで、誰かを悲しませてしまっている。自分は生まれてこなければよかった。自分には生きる資格はない。」でも、どんなに自分を責めたとしても、殺された子供たちは戻ってきません。イエスは、生まれた瞬間から罪の世の残酷さを背負うことになったのです。

しかしおかしい話です。神は全能の方ではありませんか。それなのに、なぜこのような悲惨な幼児殺人事件が起こることを許されたのか。なぜヘロデを止めなかったのか。

すべてを説明することはできません。ひとことだけ言えば、神ご自身があえて自ら進んで苦しみを引き受けようとした。そうしか説明ができません。こんなひどい残酷なこ

とがあつていいのかと叫びたくなる罪の現実の真ん中に、イエス・キリストはご自分の身を置こうとされていたのです。

ある方は、自分の力ではどうすることもできないような、重い課題に長い間苦しんでいます。生まれたときからすでに重いものを背負わされている方もいます。人生の途中で思わぬ挫折を味わい、それ以来苦しんでいる方もいます。正しく生きたいと願いながら、そのことを許さない現実、そうできない自分を見て悲しみ、泣いている方が沢山おられます。そんな人たちはどうなるのでしょうか。すべて切り捨てられるのですか。とんでもありません。

主は言われました。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」(マルコ 2:17)

主は、この世界がどれだけ罪に汚れ、悲惨なものであるのかを身をもって経験され味わってくださいました。味わうと言うことは、弱くなられたということです。

この方は罪に苦しむ私たちを腕を広げて受けとめようとされます。その腕には何が見えますか。釘に刺し貫かれた腕です。広げられた身体に何が見えますか。槍で刺し貫かれた脇腹です。

私たち罪人を招くために、主ご自身が傷つき弱くなってくださいました。